



探偵アリス 2

あぶのおおかみ

探偵アリス2

あぶのおおかみ

沢渡春彦は、ゆつくりと伸びをした。徹夜明けである。いや、沢渡の場合就寝時間が不規則なので、起きたまま朝を迎えたとしても、必ずしも『徹夜』と言うのが正しいかどうかは定かでない。第一、世の基準に照らしてみれば夜明けまでまだ大分間があるこの時刻を『徹夜明け』というのもどうだろう。

それはさておき、無謀にも「人は夜寝て、朝起きるものだ」と、彼にありきたりな忠告をする愚か者は跡を絶たないが彼らの最初に聞く沢渡の反応はこうだ。

「それはそれは：で、夜っていうのは何時から何時までになるんでしょうか？」

ここでもともに答えてはいけない。一番いいのは適当に話題を逸らして、タイミング良くその場から立ち去れるように努力することだ。それ以上の議論を望むのであれば、大脳生理学、進化生物学、動物

行動学、はては量子力学と天体物理学等々の専門家をすべて味方に付けでもない限り、徹底的に容赦なく殲滅論破されるだろう。沢渡とはそういう男だった。

沢渡は次の学会向けの発表の準備をしていた。特にこういう作業があるときは時間が不規則になるのは仕方のないことだと言えた。沢渡に言わせれば、ノっているときにしていることを中断するのは愚かなことであり、まして、他人に中断させられるなど論外であった。

もちろん、世界の真理であるこのことにも、この世のすべての事象と同様に例外というモノは厳然と存在する。それは割り込みイベントの方が「おもしろい」場合である。先ほどの早乙女からの電話がそうだった。

どうやら、Wonderlandにはまだまだ多くの謎が眠っているらしい。アリスの成長課題としては十分すぎるほどだ。

元はといえば、沢渡の上司である倉本が殺害されたことに端を発している事件なのではあるが、沢渡

は不謹慎なことにこのような謎が他ならぬ自分の開発した人工知能アリスの成長に大いに寄与するであろう見通しを得て、事件発生を歓迎する気分になっていた。大体において、世間一般の価値基準など、彼にとつては物事の重要度を決定する要因にはならないのだった。

沢渡は胸のポケットから半分潰れたタバコの箱を取り出すと、当然これも潰れているタバコを一本くわえて火を点けた。潰れているので空気の通りが悪く吸いにくいのが気にしない。そのときPCのデスクトップにアリスとの通話用ソフトの呼び出しポップアップウィンドウが立ち上がった。

「ん？ アリス…珍しいな…」

沢渡からアリスに連絡を入れるのはしょっちゅうのことだが、アリスの方から連絡をしてくることはあまりなかった。アリスには結構ものぐさなところがある。

「なんだ？ また、何か欲しいものでもあるのか？」

従ってアリスの方から何か言ってくるときは大抵

の場合おねだりしたい物があるときだけだった。沢渡は通話ボタンをクリックした。

コミュニケーションのメイン画面が開き、アリスの顔が映った。ころなしに、いつもより考え込んでいるように見えた。

「よお、今日はずいぶんと早いじゃないか。どうしたアリス？」

沢渡は軽い感じで声を掛けてみた。アリスは何か言おうとして二、三回口をパクパクさせたがすぐに言葉にはならないようだった。

「どうした、アリス？」

沢渡はもう一度訊いた。沢渡に対してはほとんど遠慮を知らないアリスが言い出し難そうにしているのは、単なるおねだりではあるまい。やつとアリスの口から言葉が出てきた。

「教授ってミドリと知り合いだよな？」

例によって、いきなりの質問であった。さすがの沢渡も虚を突かれて、くわえタバコを落としそうになった。アリスには自分と翠との関係は教えてない。アリスにとってミドリはたまたま出会った友人とし

ておいた方が、何かとよい方向に向かうだろうと思えたからだ。しかし、アリスは何らかの事象からミドリと沢渡が無関係ではないことを推察したらしい。それも、「…かも知れない」が付いていない、アリスにしては結構断定的な口調の質問の仕方から察するにかなりの確信を持っているらしい。

最初はちよつと驚いた沢渡であつたが、すぐにアリスがそういう結論に達した思考プロセスへの興味でいっぱいになった。こいつ、いったい今度はどんな成長をしたのだろうか？

「ん？　なんでそう思ったんだ、アリス？」

「え、なにが？」

「だから、俺とミドリが知り合いかも知れないと考えた根拠だよ」

「だって、ミドリに話したこと教授は知ってるし、教授に話したことはミドリに伝わっているじゃん」

おや、そんなことがわかつてしまったのか？　沢渡は結構ミドリとは口裏を合わせて、アリスにはすぐに感づかれないようにしていたつもりだったのだが、もちろん、積極的に箝口令を敷いて機密保持に神経

を使っていたわけではない。バレたらバレたでそれはそれでいいのだ。その意味するところは：

「第三段階まで来たか…」

沢渡は口の中で呟いてみた。

「え、なに？」

アリスは訝しげな顔をした。

「いや、なんでもない。そうか、アリスにはバレちゃったか…」

「じゃあ、やっぱりそうだったんだ。教授とミドリは秘密の關係を持っていたんだあ！」

「おいおい、人聞きの悪い言い方をするなよ」

さすがの沢渡もあわてて言った。

「だって、そうなんですよ？」

「いや、字義通りの意味ならそうなんだが、言葉という物はコンテキストや、その場の状態によつて、同じ単語の並びでもニュアンスを変える物なんだ」

「知ってる」

そう言つてアリスは笑つた。

「つて、わざとかよ！？」

言いながらも沢渡はちよつと気になった。アリス

はまだ本来の用件を切り出せずにいるようだ。こんな言葉遊びは躊躇いを何とか振り切ろうという試みなのではないかと思われた。アリスが訊きたいのはミドリに関連したことであろうが、どうやって訊けばいいのかわからないらしい。いつも単刀直入なアリスにしては珍しかった。いや、多分アリスにとって簡単に言い表すのが難しい質問なんだろう。

「ところでアリス、準備はもう万端なのか？ クスヌに出發するのは、もう明日だろうか？」

沢渡は、自分の方から話題を振ることにした。こうして話題をいろいろ流すことで、アリスに何か話のきっかけになるようなことがあるかも知れない。

「うん。大体はだけど…」

アリスは上の空のような感じで答えた。ああ、これではダメだ。話題の流れについてくることはできないだろう。アリスは気が急いているのに、必要な言葉が見つからなくて、心が空回りしているようだ。

沢渡はなるべく自然に話を誘導しようと思っていたのだが、それでは手間がかかりすぎると思い直して方針を変えることにした。いや、沢渡は大抵の場

合、事が面倒になりそうだと判断すると、すぐに当初の方針を遺棄するのだ。沢渡とはそういう男だった。

「ミドリについてのことを話そう」

沢渡は、いきなりそう言った。唐突ならアリスに負けていない。ならば、最初からそうすればよかったじゃないかというツツコみは、沢渡にとつては無意味だ。彼にとつて核心に近づく方法というモノは、状況によってどうにでも変わってくる物なのである。最初に試みたやり方に拘ることもなければ、方針の変更に躊躇することもない。そのとき最善と思われる手段を取るだけだ。うまく行かないようなら他のアプローチに切り替えればいい。いつもダメモトが基本だった。

「ミドリは翠という娘のアバターで…その翠というのが俺の姪ということになる」

沢渡はまずそう言って、アリスの反応を見た。自分でも少し持つて回った言い方だったかも知れないとは思ったが、ここは噛んでふくめるぐらいの方がいいだろう。アリスが勘違いして廻り道に入り込む

とハンパなく話がややこしくなりそうだったからだ。

「つまり翠は、俺の兄の娘にあたる」

だから沢渡はもう少し情報を付け加えてやった。

だが、考えてみればアリスにとって血縁関係の情報などあまり意味がなかったかも知れない。アリスにはもともと家族などないのだから関心を引くにいたらぬ属性ということもあり得る。沢渡はよくアリスのことを「俺の娘」と言っているが、少なくともアリスには生物学的な血縁関係に基づく一部の遺伝子情報を共有する小集団という意味での家族はいない。

「そうか…、そうだったんだ…」

しかし、アリスはそう言って少しだけ楽になったような声を出した。そして、いつも通りいきなり核心に迫る質問を発してきた。

「じゃあ、知ってるんだよね？ ミドリの…母親！」

「なんだって!？」

沢渡は驚いた。その話題は翠と関係する誰にとっても深刻なものになるだろう。なかなか切り出せずにいたところを見ると、アリスにもそれがわかっていたらしい。と、いうことは…

「翠から何か聞いたのか？」

「うん、少しだけ…」

「そのことについては、翠の了承もなく、俺の一存で話すわけにはいかないんだ」

沢渡は首を振って見せた。

「翠からはいつ、どの程度のことを聞いたんだ？」

「昨日だよ」

アリスは答えた。

「ミドリは朝一に来たんだけど。そのときミドリ、なんかちよつとそわそわしてるって言うか、不安定と言うか…まあ、私も徹夜明けでちよつとハイになつてたから、相対的なものもある…かもしれないけど」

「そんなこともわかるようになったのか？」

「え？」

「いや、すまん…、続けてくれ」

沢渡は口を挿んだことを謝って、続きを話そうに促した。

「うん、気になることがあるみたいだったんだ…ミドリ…」

アリスは言葉を選ぼうとしているようだったが、やはりその努力はやめることにしたようだった。まわりくどい言い方は、どうあっても性に合わないらしい。

「ほら、例の《バベルの破壊者》。本物（？）の宗教つてやつ。この前攻撃してきた、あいつら」

「ああ…」

やつと沢渡にもアリスが訊きたがつていることが見えてきたような気がした。

「それで、翠がお前になんか言ったんだな…その…

母親のこと…」

「そう、帰りがけにね…」

アリスは詳しく話し出した。

それは、昨日の朝、ミドリがアリスの家を訪ねてきたときだった。

その日のミドリは自分では気がついていないようだったが、アリスの目には何かそわそわしたような落ち着きのなさが感じられた。

やがて、ミドリ自身も自分の不安感の原因に気付

いたようだった。ミドリはアリスに《バベルの破壊者》には十分注意するように警告した。

一方、そのときアリスは冒険への期待感にわくわくするような胸の昂まりを覚えていた。そして、そのいくらかはミドリにも感染したらしかった。

来たときは無意識の不安感に苛まれ、アリスの目から見てもどこか不安定に見えたミドリは、帰ろうとする頃にはずいぶんと昂揚して見えた。

だが、戸口まで行つたミドリはそこで立ち止まり、しばらくそのまま何か考えているようだったが、やがて意を決したようにアリスの方を振り向いた。

「やつぱり、アリスにはみんな話しておいた方がいいよね」

「え？ なに、どうしたの？」

「あたしと、あたしの家族と、《バベルの破壊者》のこと…」

そして、アリスは知った。ミドリのメタ同一存在である翠とその家族を襲った、悲惨な運命のこと。《バベルの破壊者》がもたらした災厄のこと。母親

の変貌と翠が失ったもののこと。暗い、暗い部屋の中での憎悪の正のフィードバックループのことも…

「そこまでの話をしたのか…翠は…」

アリスが話し終えた沈黙の後、沢渡はそっと呟いた。翠の気持ちはわからないでもなかったが——亡くなった妹の葵とアリスを重ねて心が補償されているのだろう——沢渡にはそういう話はアリスにはまだ負荷が大きすぎるのではないかと思えた。家族というものと一緒に暮らしたことがないアリスには、血縁者間の葛藤など手に余るというものだろう。

「それで、翠の母親のことを聞きたいと？」

沢渡は、やや困惑した声になっていた。アリスに好奇心といったようなモノが芽生えたのはその成長を示すことなのであろうが、こういったまだ手に余るであろう人間関係のドロドロに迂闊に踏み込んでしまうというリスクも増大している。それはアリスの成長にとって、ポジティブな効果があるかそれともネガティブな影響を与えるかまるで予想できない分野である。ただの密室殺人の謎解き程度のことと

は同列に語れることではなかった。

「ちょっと…ちょっと気になることがあるような…」

例によって、曖昧な口調でアリスは言った。だが、次に続いた言葉は、まるで関連がないように思える事柄だった。

「クスヌのダンジョンには、何か大事なモノが隠してあるらしいんだよね？」

「え？」

さすがの沢渡も、これには虚をつかれた。アリスのやつ、なにを考えているのか？ 脈絡がないにも程があるだろう。

「でも、そのなにかを『バベルの破壊者』は欲しがっているみたいで、それでもって、ミドリの母親は『バベルの破壊者』なんだよね？」

つづけてアリスがそう言ったのを聞いて初めて沢渡は、アリスがどういう風な状況の見方をしているか理解する鍵に気がついた。『過剰な関連づけ』だ。つまりアリスは、翠の母親が『バベルの破壊者』に入信したという事から、次のように関連づけたの